経験の場――『善の研究』から歴史的身体の「形」へ

板橋勇仁（立正大学）

西田幾多郎の処女作『善の研究』は、「純粋経験」を「唯一の実在」とするという意味で、「経験」の立場に立つものと言えよう。いま改めて問うなら、それは、経験をどのように捉えることを意味するのか。提題者は、『善の研究』執筆後に作成された西田の講義ノートにある思想を元に、『善の研究』の特性とその意義を、我々の日々の経験を「一なる場」として捉える立場のそれとして明らかにしたい。

本提題で見ていくように、この立場は、日々の経験において、我々の自己と他の存在者とが〈一である〉ことと、それらが異質にして異他的で〈分かれてある〉こととが同時に一つのことであるありようを捉える。しかもこの経験について、我々の自己は、自らによっていっさいを統御しようとする主観的自己の立場の否定によって、他によって決して代わられることのない仕方でそれを生きていると捉える。

この際に重要となるのは、『善の研究』における身体への考察である。従来、『善の研究』では、経験における身体の役割の重要性については、詳しい考察が展開されていないと考えられてきたきらいがある。しかし、看過されてきたことであるが、実は身体への考察なくして、『善の研究』は成り立たなかったのではないか。そしてそのことを充分に表現できなかったところに、『善の研究』の限界の一つがあるのではないか。

もしも以上のように見ることが妥当であるなら、『善の研究』から中後期西田哲学への展開において、「歴史的身体」という思想が登場してくる必然性もまた理解できるように思われる。

よく知られるように、後期西田哲学は、歴史的実在の世界における我々の自己の行為を問題にし、その際に「歴史的身体」の思想が提起される。ただし、提題者からすれば、「歴史的身体」の議論はともすれば外挿的にも見えるものであり、実はそれを西田哲学の生成の内的な必然性において捉える試みは、いままでの西田研究においてもまだ途上にあると思われる。

それに対して、本提題では、『善の研究』が、本質的に身体への考察を内包する仕方で、「経験の一なる場」の立場に立つこと、そしてそうした『善の研究』の思想が元にあるゆえに、「歴史的身体」という思想が生み出されたことを明らかにしたい。そしてそのことで、「歴史的身体」の思想の持つ現代的意義が、従来の研究とは異なる新たな観点から明らかになること示したい。この試みは、まさに『善の研究』から哲学を展開することの意義の一端を明らかにすることである。